生徒の感想文

初めての長期旅行で貴重な体験ができて、すごく濃い思い出がたくさんできました。1，2日目は、東北で東日本大震災のことをしっかり学ばせてもらいました。実際に学校の中も拝見して災害の重みを感じることができました。津波の映像など、とても生々しく見ててつらくなるものが多かったです。その中でも、感動した映像は卒業式の映像でした。大切な家族や友達、たくさんの物を亡くしてしまった後にした卒業式の映像は、たんさんの感情が見えました。怒り、悔しさ、何よりも大切なものをたくさん失った悲しみは、とても大きく見えました。そんな中の最後の校長先生の言葉はとても感動しました。「しっかりやるんだぞ！」という言葉はすごく心にひびきました。

東北に行って災害の勉強をしたあと、まさか4日目に自分たちが災害に遭うとは思っていませんでした。災害に遭った人の気持ちがよく分かりました。自分たちは、幸いにも1日ですみましたが、これが、1週間、1カ月も帰れないと思うと、すごく辛くなりました。でも、無事に元気で帰ってこれて良かったなと思いました。

実際に被災地に行き、ボロボロになっている校舎や、教室を見て、津波の恐ろしさを改めて感じることができました。校舎をそのまま残しておくのは、辛いかもしれないけど、実際に見るからこそ、思うことがたくさんありました。私がとくに心に残っているのは、震災の10日後に行われた卒業式の様子のビデオです。震災で失ったものがたくさんあるなか、堂々と前向きな言葉を言っている姿を見て、同い年とは思えないほどしっかりしていて、胸を打たれました。

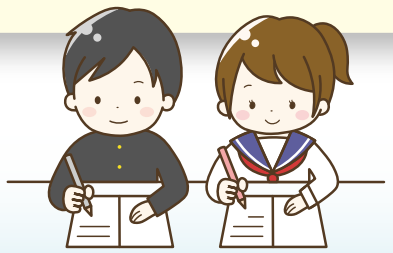
また、3．11みらいサポートでも、語り部さんのお話を聞いて、「同じことがおきてほしくない」という言葉が強く心に残りました。私も実際に話を聞いたり、現地にいったりしたからこそ、二度と同じことがおきてほしくないと強く思うようになりました。

東日本大震災が起こった時、私は3歳だった。詳しいことは覚えていないが、祖母がテレビを見ながら「大変そうだねぇ」と言っていたことは覚えている。それから何年か経ち学校で「アイリンブループロジェクト」の存在を知り、つい先日、実際に宮城県の門脇地区に行き、佐藤愛梨さんの母親のお話を聞いた。「愛梨は今日、5月31日が誕生日で、本当なら19歳になるはずでした。」私はとても驚いた。私は愛梨さんの顔を13年前の写真でしか見たことが無かったが、愛梨さんは自分よりも、自分の兄よりも年上だったのだ。それなのに、たった1度の地震で、運が悪かっただけで、13年前で時が止まっているのだ。

門脇地区は津波の影響を感じさせないほどに復興していたが、そこにはどれほどの年月をかけてももとには戻らないものがあった。

東日本大震災については、これまでも画面越しでしか見ることができませんでした。私は、大震災やそれによる大災害を体験したことがなかったので、現地で被災したままの姿の学校を見たときは、あまりの衝撃に言葉が出てきませんでした。

3．11みらいサポートや伝承館で聞いた、現地の人の言葉と思いは、画面越しで見たり聞いたりするより、直接心に響きました。それは、私が学んできた東日本大震災の知識に加え、これまで以上に気をつけようとする心、災害に対する怖さ、命の大切さへの意識が高まりました。このような機会をいただけて、感謝しています。

東北は、とても澄んだ空気の広々としたところだった。私は、ずっと「津波でたくさんの人を失って辛い思いをしたはずなのに、どうして被災地から去らないのだろう」と東北に住み続ける人たちに疑問を持っていた。しかし、語り部さんのお話を聞き、その場に行ったことによって、人々の気持ちが少し分かるような気がした。気仙沼市は復興のテーマとして「海と生きる」という言葉をかかげている。これには、地元の人々の「海があるから生きていける。前を向ける。」という思いが込められている。私は、「海」という存在は辛いことをもたらしたものでもあるが、「支え」でもあるということに気づかされた。大自然と共に生きる東北の方々は、どことなく優しいあたたかい感じがした。どんなに頑張っても取り戻せない命の重みを感じる時間だった。「助けられる」側ではなく、人を「助ける」側になりたいと強く思いました。

私たちは岩手県と宮城県へ行き、東日本大震災について学んできました。たくさんの考えをみんなで共有し深めることができました。震災遺構を見たり、語り部さんのお話を聞いたりし言葉にできない思いをしてきました。中でも佐藤愛梨ちゃんのお母さんの佐藤美香さんの話を聞くことができたことはとても貴重な体験でした。私たちは今、この体験を生かして防災新聞を作っています。これを作り掲示することで、私たちの感じたことを他人事でなく、自分事としてとらえることができました。